

# 植民地期の「日鮮」文化交流史研究 - 松田甲の『日鮮史話』を手がかりにして

## Studies on the History of Japan-Korea Cultural Exchange in Colonial Period: In the Case of Matuda Ko's Nissen Siwa

プロジェクト代表者：権 純哲（教養学部・教授）

KWON, Soon Chul (Faculty of Liberal Arts, Professor)

日韓文化交流史研究の一原型となった松田甲の学問的成果を手がかりにして、両国間の文化交流に対する学術研究上の源流を確認し、その学術思想史上の意義を考察しようとするこの研究においては、（１）松田甲（1863～1945）の教養や学問の形成過程とその社会的背景を明らかにし、明治期の学術と教育状況に対する理解を深めること、（２）松田甲の植民地朝鮮での学問・学芸活動の内容を詳しく精査し、実質的な朝鮮人との交流の実態を明らかにし、また日朝文化交流史研究の内容を明らかにし、その歴史的意義を考えることを、主な課題とする。

このプロジェクトによって明らかになった事項をあげると、次のようになる。

まず、松田の学問と教養の形成過程においては、会津戊辰戦争後、北海道に移住し、15歳のときに上京するまで生活する。近藤真琴の攻玉社で測量をはじめとした近代学問を3年間学び、卒業した後、参謀本部の測量技手となり、日清・日露両戦役に従軍するなど、台湾、朝鮮、満州等を踏査する。その間、野口寧斎、森穂南等に師事し漢詩に励んだことは、後に朝鮮での詩社主宰などの活動につながる注目すべき重要な経歴といえよう。

つぎに、朝鮮総督府臨時土地調査局監査官として測量と地図製作に携わった後、総督府嘱託として日鮮文化交流に関する調査をおこなう松田甲は、『朝鮮』や『文教の朝鮮』そして『朝鮮通信協会会報』などの雑誌に寄稿する。朝鮮総督府による啓蒙用冊子『日鮮史話』（1926年～1930年全6編、『続』1930年全3編）は、これらの発表記事をまとめたものであるが、総督府主催の各種講習会の教材として活用されていた。いっぽう、短篇的な雑記をまとめた『朝鮮雑記』がこの前の1925年に出版され、その続編となる『朝鮮漫録』1928、その姉妹編となる『朝鮮叢話』（1929）と続き、また『朝鮮の今昔（歴代篇）』（1927）がある。これらの雑記は、朝鮮への観光誘致や朝鮮文化紹介のために携行し易いポケット・サイズである。松田のこれらの本はすべて朝鮮総督府によって非売品として出版されたものである。

最後に、日韓文化交流史研究における松田の業績は、①渡来人や文禄の役の捕虜、そして江戸時代の朝鮮通信使に象徴される人的交流の事例を発掘、紹介したこと、②仏教の経典や儒学関係書籍の伝来の実態を明らかにしたこと、③それぞれの文化交流の史跡の持つ歴史的意義を強調していたことの三点に要約できる。これは、当時の朝鮮統治のスローガンであった文化政治政策との関連で重要な意味を持つのだが、松田によって啓蒙されていった日鮮文化交流の史蹟に対する理解が、当時の朝鮮人においては、むしろ、日本への文化紹介者としての文化的優越意識をもたらしたことをも、予期したか否かとは関わらず、注意すべき点である。

原稿がまとまり次第、発表する予定である。